

世界臨床検査通信シリーズ-4

OECD Health報告2015

－医師、医療従事者の適材適所を考える

国際臨床病理センター・自治医科大学名誉教授 河合 忠

2010年厚労省統計によると現員医師数は16万7千人(女性17.4%)で、「医療従事者の需給に関する検討会」では2024年頃には約30万人となり、医師の需給が均衡すると推定されている。しかし、依然として医師の地域別や専門別の偏在、ミスマッチが課題とされている。それでは世界の趨勢はどうであろうか。

2016年3月15日、OECDが2013年に調査した加盟国の医療事情に関する報告の中で、今回は医師数についてまとめてみよう。医師、看護師の数はともに史上最多となり、医師360万人、看護師1,080万人となった。加盟国別の医師数(人口1000人当り)は図の通りである。とくに、今世紀に入って医師数の増加が著しいのは、トルコ、韓国、メキシコなどであるが、2000年時点で既に多かったスイス、ノルウェー、デンマーク、ギリシャ、オーストリアなどでも増加している。こうした医師数増加について、OECD加盟国全体として、受け入れた医学生数の増加と移民の増加が主因とされている。問題とされているのは、勤務医の17%はOECD加盟国以外で教育を受けた医師であり、その3分の1は既に医師不足に直面するアフリカ、アジアなどの低所得国からの移民である。とくに移民医師が目指すのは米国(20万人以上)と英国(4万8千人以上)である。ちなみに米国では、外国医大卒業医師の48%はアジア(インド22%、フィリピン6%、パキスタン5%、中国3%、など)、11%はEU加盟国、アフリカ6%、メキシコ5%、などとなっている。国際的にも医師の需給の不均衡が大きな課題である。さらに、医師の能力差も懸念されている。そこで、米国では、2023年以降、受け入れる研修医・臨床医の条件として、米国・カナダ以外の医科大学が世界医学教育連盟(WFME)の国際基準を満たしていることとしている。いわゆる“2023年問題”である(モダンメディア59巻9号随筆、2013)。

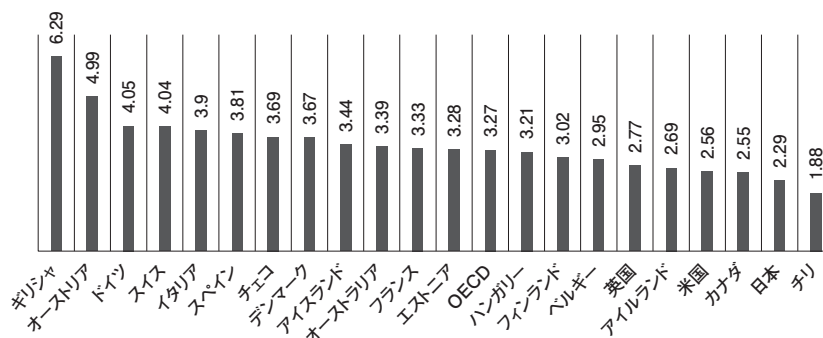


図 医師数